

# 益田氏関連遺跡群 I

—— 勝達寺跡・七尾城跡 ——

1993年3月

益田市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は平成4年度（1992年度）に益田市教育委員会が国及び島根県の補助金を得て実施した国庫補助事業益田氏関連遺跡群発掘調査の概要である。

2. 発掘調査を行った遺跡は次のとおりである。

勝連寺跡　　益田市東町所在

島根県史跡七尾城跡　益田市七尾町所在

3. 調査は次のような組織で行った。

調査主体　益田市教育委員会　教育長　田中　稔

事務局　田村尚弥（社会教育課長）・岡崎松男（同課長補佐）・矢留剛志（同体育文化係長）・長嶺勝良（同主事）

調査員　木原　光（社会教育課体育文化係主事）

調査指導　服部英雄（文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官）・川原和人（島根県教育委員会文化課主幹）・黒田貴保（同文化財係主事）・永原慶二（和光大学教授）

井上寛司（島根大学法文学部教授）・村上　勇（広島県立美術館主任学芸員）・

千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部助手）

4. 発掘調査にあたっては次の方々からご協力をいただいた。記して感謝いたします。

（順不同・敬省略）

瀧　保丸・神崎早苗・新松晴美（益田市歴史民俗資料館）・天石勝神社（小川治宮司）・益田公民館（横山と三館長）・住吉神社（安達寅人宮司）

5. 発掘作業には次の方々に参加していただいた。

岩本哲夫・岩本末子・永安ユキエ・杉内恵美子

6. 本書に掲載した七尾城跡現況地形測量図は株式会社大建コンサルタントに委託して作成したもの  
を淨写して使用した。

7. 掘図中の方位は、磁北を示している。

8. 本書の編集と執筆は木原が行った。

（表紙題字は島根県文化財保護指導委員大賀金雄氏による）

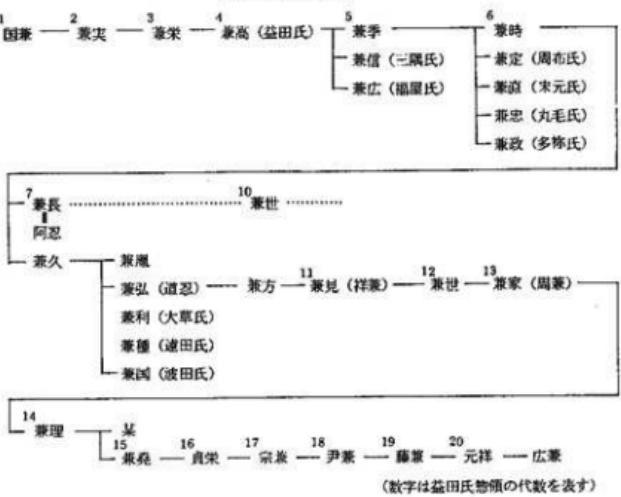
# 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の位置と歴史的な環境 .....	1
III 益田氏の概略 .....	4
IV 既往の調査 .....	7
V 発掘調査の概要 .....	8
1. 勝連寺跡発掘調査 .....	9
2. 七尾城跡発掘調査 .....	14
VI まとめ .....	30
文献資料 .....	32

## 挿図目次

第1図 勝連寺・七尾城跡と周辺の主要遺跡	第10図 調査区配図
第2図 三宅御土居跡調査区配置図	第11図 磐石建物跡平面図
第3図 七尾城跡礎石確認位置図	第12図 磐石断面図
第4図 調査遺跡位置図	第13図 サブトレント1北面上層断面図
第5図 勝連寺跡調査区配置図	第14図 サブトレント2東面上層断面図
第6図 勝連寺跡採集鬼板拓本	第15図 サブトレント3平面図及び土層断面図
第7図 石勝神社勝連寺古図	第16図 遺物実測図(1)
第8図 益田本郷絵図	第17図 遺物実測図(2)
第9図 七尾城跡構造図	

## 益田氏略系図



## I 調査に至る経過

昭和58年（1983）7月に発生した山陰豪雨災害で島根県西部は大きな被害を蒙った。これにより益田市及び三隅町の市街地が壊滅的な打撃を受けたことから同年8月には島根県益田市三隅町防災都市構想策定委員会が設置され、12月には街路網と河川改修計画を内容とする防災都市構想が発表された。そして、昭和59年6月には沖田七尾線が都市計画決定され、8月には事業認可を受けて益田川の河川改修と橋梁整備事業が着工された。

しかし、この沖田七尾線事業が島根県史跡三宅御土居跡を南北に横断している現市道を12mの防災道路として拡幅する計画で、しかも指定地の一部の現状変更を必要とする内容であったため平成元年から保存問題が持ち上がった。

以来、街路整備と遺跡保存の調整が難航し、また、三宅御土居跡についてはこれまで発掘調査が行われておらず遺跡の実態が明らかにされていなかったため、文化庁及び島根県の指導により益田市教育委員会では平成2、3年度に遺跡の範囲と保存状態を確認する目的で国庫補助事業で発掘調査を行った。

その結果、周辺に配置した調査区の6箇所において掘跡ないし川跡が確認されておよそその範囲は確認され、また、遺跡の内部に設定した調査区では地山面に多数のピットが検出されるなど全体的に保存状態は良いと判断された。さらに、三宅御土居はこれまで益田家文書の解釈から1370年前後に築造されたと考えられてきたが、出土遺物の内容からその初現は12世紀に遡る可能性が高まった。

この結果に基づき、益田市は三宅御土居跡と都市計画街路との調整について現在関係機関と協議中であるが、益田市教育委員会では平成4年度から居館跡三宅御土居跡と密接に関連する益田氏の拠城七尾城跡を主な調査対象に当面3年継続事業として国庫補助事業益田氏関連遺跡群発掘調査に着手することとなった。

## II 遺跡の位置と歴史的環境

益田市は島根県の西端に位置する。面積301km<sup>2</sup>の市域の西は山口県に接し、北は日本海に面している。益田川と高津川の二大河川によって形成された沖積平野部を中心に市街が広がり、人口は5万人あまりの島根県西部地域の中核都市である。かつては旧石見国に属し、現在は鹿足郡、美濃郡と併せ石西（石見西部）と呼ばれる。

さて、勝連寺跡については益田市染羽町地内に所在し、重要文化財の本殿を有する天石勝神社境内地に隣接する東側の台地上に推定されている。

一方、県史跡七尾城跡は益田川が蛇行して益田平野部に流れ出す位置の東側の丘陵上、住吉神社背後の細い尾根上に立地する。最高部の標高は約117mで、平野部を東側から眺望できる格好の位置を占め、本丸跡は益田氏の居館跡三宅御土居跡とは益田川を隔てて約700mの距離がある。

さて、勝連寺跡や七尾城跡をはじめとする中世の益田氏に関連する遺跡や史跡、神社仏閣は益田地区（いわゆる旧益田とよばれる地区）に特に集中している。

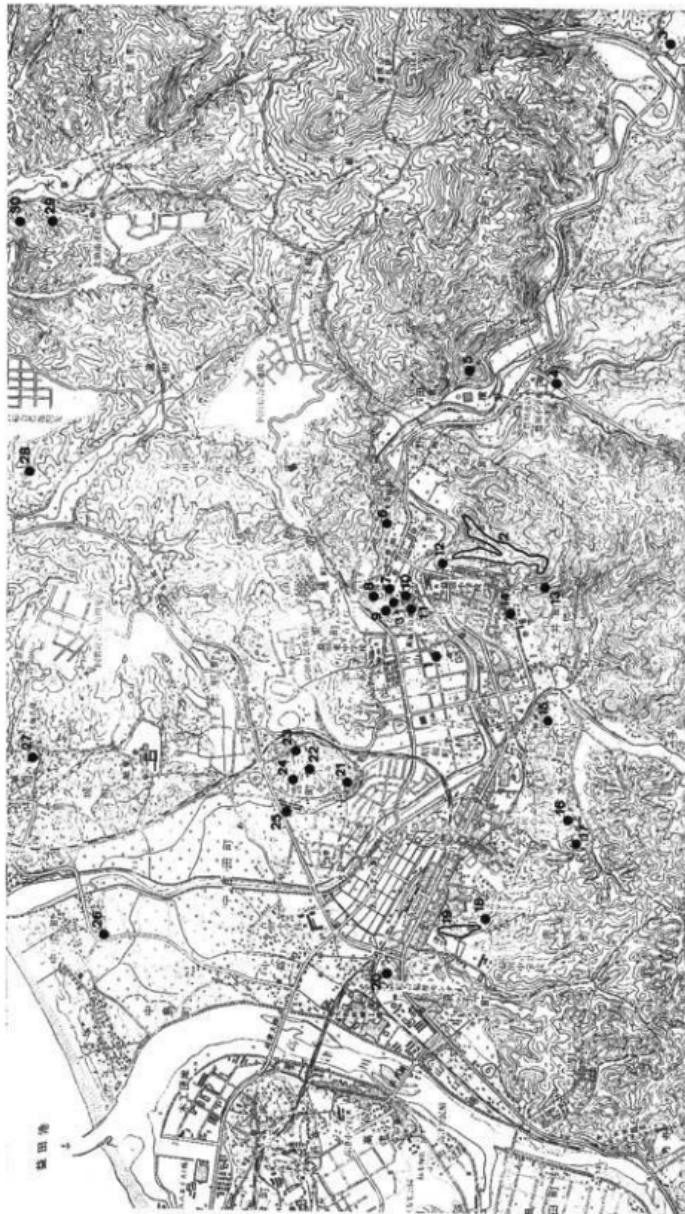
益田氏の居館跡県史跡三宅御土居跡は益田川の右岸近く、浄土真宗松龍山泉光寺境内を中心とした微高地上に位置し、東西には大規模な土塁が現存する。平成2、3年度の発掘調査によって主に周辺部の調査が行われた結果、東土塁と西土塁の外側で幅約9mの箱堀、北側で幅13m以上の堀が発見され、さらに、南側の3箇所で川的な要因が確認されたことによって、三宅御土居の最終的な形態は全体的に東土塁一帯が北側に突出した変形した形であることが明らかとなり、また、築造は1370年代の初めといわれてきたが、出土遺物の内容から12世紀まで大幅に遡る可能性が高まった。

この他、中世の益田氏に関連する史跡、文化財等としては、益田氏15代兼秀が招いたといわれる雪舟の作庭と伝えられる史跡及び名勝医光寺庭園、万福寺庭園がある。

医光寺はもと天台宗崇觀寺の塔頭としてあり、正平18年（1363）に創建された臨済宗東福寺派の寺院で、両寺は益田氏の庇護により寺領1,500石の禪宗道場であったが、南北朝の争乱や火事により衰えたので17代宗兼が再建した。境内にはかつて七尾城の大手門であったと伝えられる県有形文化財医光寺総門や宗兼墓碑（墓は土砂崩れにより埋没）や、雪舟灰塚も残る。

時宗清瀧山万福寺はもと安福寺として益田川下流域の中須にあり、当時は天台宗であったが、万寿3年（1026）の津波により流失したため、11代兼見が応安7年（1274）現在地に移転し、万福寺と改称して寺領31石を寄進したといわれる。桁行7間、梁行7間の寄棟造りの本堂は重要文化財に指定され、応安7年銘のものを含めた5枚の棟札が附指定になっている。また、兼見寺領寄進状をはじめとする文書資料や鎌倉期の仏画重要文化財二河白道図など絵画の類も多い。境内地椎山には兼方、兼見の五輪塔が残る。

萬歳山妙義寺の創建は同寺に残されている古文書から文永年間（1264～1274）といわれ、当初は臨済宗で妙義庵と称したが、応永年間（1394～1427）の初めに13代兼家が再興し



1. 繁史跡三宅御土偶跡 2. 繁史跡七尾城跡 3. 上久々茂土偶跡 4. 大谷土偶跡 5. 大谷土偶跡 6. 医光寺 (延喜式は国重斯及び名勝) 7. 染羽天石神社 (本廟は国重斯及び名勝) 8. 秋葉山古墳 9. 片山城穴群 10. 市史跡益田兼見墓 11. 万福寺 (延喜式は国重斯及び名勝、本堂は国重斯文化財) 12. 市史跡益田兼見墓 13. 市史跡益田兼見墓 14. 炙夷寺 15. 新宿城跡 16. 水分經塚 17. 水分A經塚 18. 赤城跡 19. 北野追跡穴群 20. 高川城跡 21. 高ヶ公城跡 22. 小丸山古墳 23. 四家山古墳群  
24. 上の山城跡 25. 市史跡今市點着場跡 26. 具有形文化財石造十三重塔 (建時:溫王寺) 27. 国史跡スコモ塚古墳 (前後円:60m) 28. 大元1号墳 (前方後円:80m) 29. 具有形文化財木造須弥壇 (延喜四年:東福寺) 30. 大草塚跡 31. 善通寺跡

第1図 勝達寺跡・七尾城跡と周辺の主要遺跡

て寺領370石を寄進して自らの菩提寺とした。境内には七尾城の堀跡の名残りといわれる丸池からの川跡が残り、七尾城の附指定となっている。また、寺院からは離れているものの15代兼堯、19代藤兼の墓も妙義寺境内地に残っている。この他七尾城下の寺院として天正6年（1578）創建の曉音寺、天正5年（1577）創建の順念寺がある。

天石勝神社は神龜2年（725）に創建されたといわれ、延喜式内社にも列されている。承平元年（931）に別当寺勝達寺が建立され、紀州熊野十二社権現を勧進して瀧藏山瀧藏権現と称した。棟札写しによると、天正9年（1581）に火災により焼失したため、19代藤兼が勧進し、20代元祥が大檀那となって天正11年に再建し、14年には拝殿の再建も成ったといわれる。本殿は重要文化財の指定を受け、神楽殿もかつては県指定であった。一方、勝達寺は古義真言宗で、中世初期には境内に16坊を構え、末期頃には権現社の社務も掌握して当社の造営、祭事全般にわたって支配的な立場を占めたが、明治の廃仏毀釈により廃寺となり、権現社も社名を天石勝神社に改めた。なお、本尊不動明王坐像は現在鎌倉市の極楽寺に重要文化財として残り、勝達寺に所有されていた仏画釈迦十六善神像が県有形文化財として泉光寺に伝わっている。

また、三宅御土居以前の益田氏の居館跡として上久々茂土居跡、大谷土居跡があり、乙吉町の今市川には、益田氏が行っていた朝鮮貿易、日本海貿易の拠点としたと推定される市史跡今市舟着場跡がある。

山城跡については、市内に30以上が分布するが、益田地区及び周辺には七尾城跡の他に稻積城跡、大谷城跡、赤城跡、高川城跡、鳶ヶ松城跡、上の山城跡、大草城跡などが点在する。

### III 益田氏の概略

益田氏は石見を拠点に勢力を跨った中世の山陰における有力豪族で、平安後期の永久年間頃に石見国府の雜任国司として都から下向した藤原鎌足の後裔国兼を始祖とするといわれる。国兼が国府地域の上府（現在の浜田市）御神本の地に土着したことから始め御神本を姓としたとされ、4代兼高が建久年間頃に本拠を益田莊に移して以来益田氏を称し、以後開ヶ原の役までの約400年にわたり山陰の有力武士団として強力に成長し、その勢力を保持し続けた氏族である。

源平の争乱時、石見押領使に任じられて平家の追討に功のあった兼高は鎌倉幕府の御家人となり、その後所領を分与された三隅氏、福屋氏、周布氏など一族諸氏とともに益田氏は石

見のそれぞれの開発と支配を進めた。鎌倉初期における益田氏の所領は、国衙領や益田荘、長野荘を中心に石見全域のおよそ三分の一を占めていた。6代兼時は蒙古の襲来に備え、海岸部に石見十八砦を築いたといわれる。

南北朝から室町期前半にかけて、益田氏の庶子家は惣領家から完全に独立して南朝方に属し、北朝方の惣領家と対立抗争が続いたが、南北朝中期に庶子家から11代兼見が惣領家を継承するとともに、強力な家臣団編成と支配機構の整備を行い、領域支配を強固に確立した。居館三宅御土居は、万福寺とともにこの兼見によって築造されたと考えられてきた。さらに、貞治3年（1364）に大内弘世が周防長門石見の守護になると、益田氏は大内氏と結んで石見の各地で戦った。

室町末期から戦国時代前半にかけては、益田氏は、有力守護大名として幕府内でも強力となった大内氏との主従関係を強めて中四国、九州、近畿の各地に転戦するとともに、三隅、周布、福屋の庶子家や津和野吉見氏とも激しく対立しながら勢力の拡大を図ったが、15代兼堯は応仁、文明の乱の後に、敵対関係のこれら諸氏を押さえて石見内における国人一揆の盟主となった。兼堯は当時山口で大内政弘の庇護を受けていた雪舟を益田に招いたとされ、雪舟筆による肖像画が残されている。さらに、幕府の実権を握った大内氏とともに入京した17代宗兼は、大外様衆に列せられた。

戦国時代後半、天文20年（1551）に大内義隆が陶晴賢に討たれて大内氏が滅ぶと、19代藤兼は姻戚関係のあった陶氏と呼応して津和野吉見正頼を攻めたが、毛利元就が陶氏を滅ぼすと、益田氏は石見に孤立して窮地に陥り、この時に七尾城の大改修が行われたといわれる。しかし、吉川元春の斡旋により益田氏は毛利氏に属することになった。その後、20代元称は毛利輝元に従い中国各地で戦い、文禄慶長の朝鮮出兵にも参加し、天正11年（1583）には三宅御土居を改修したという。

慶長5年の関ヶ原の役の後、西軍に属した毛利輝元が防長二州に減封されると、徳川家康から石見の所領を保証する旨内意があったにもかかわらず、元祥は毛利氏への忠誠から長門須佐に移り、以後益田氏は知行高12,000石を与えられ、長州萩藩の永代家老として藩政の中核にあった。



第2図 三宅御土居跡調査区配置図

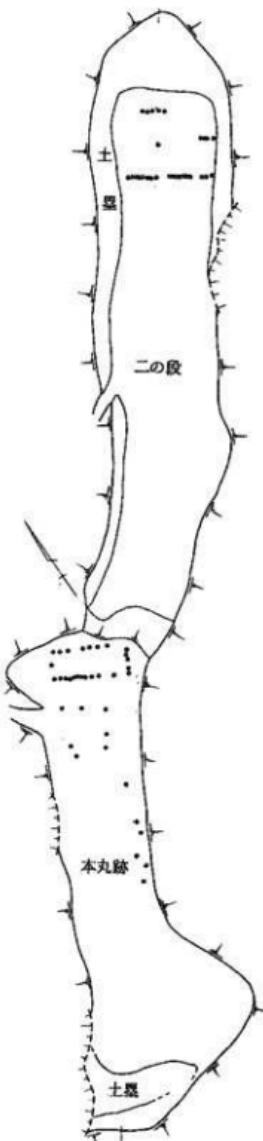
## IV 既往の調査

益田氏関連遺跡については、これまで特に計画的に発掘調査は行われていないが、都市計画街路事業との調整に伴い、範囲確認を目的として平成2、3年度に県史跡三宅御土居跡の調査が国庫補助事業として行われた。この他、小規模ながら平成3年度に都市計画街路事業に伴う県有形文化財医光寺総門の移転に伴う発掘調査が実施されている。なお、今年度の益田氏関連遺跡群発掘調査の対象とした勝達寺跡と七尾城跡の2遺跡については、今日まで発掘調査は行われていない。

しかし、七尾城跡については簡便な方法ながら本丸跡と二の段で礎石建物が存在することが報告されている。これは、昭和58年にツツジの植栽に伴い扁平な川原石が発見されたことが契機となり、鉄棒を地中に立てながら探った結果、本丸跡北端の部分で、東西10mにわたって13個の川原石が発見され、その間は山石（割石）で詰められ、さらに4.1mの間隔で平行して北側にも0.9m間隔で川原石が10個並んでいたという。また、短辺には4個の川原石があり、南側の礎石列よりさらに南側にも5個の川原石が認められ、一帯から多くの瓦片が出土することも報告されている。

ついで、二の段では、北端付近から約15mの地点で東西方向に山石の礎石4個の列、さらに南に4m離れて並列する3個の礎石、さらに4mの間隔で平行する20数個の山石の礎石列が発見された。礎石はすべて山石（割石）で、瓦は発見されなかったという。

また、七尾城跡における遺物については、昭和51年以来本丸跡東側斜面から瓦、甕、灯明皿、土鼎（足鍋を示す）、摺鉢、白磁、鉄滓が表面採取され、そのほとんどは益田市立歴史民俗資料館に収蔵されている。



第3図  
七尾城跡礎石確認位置図

## V 発掘調査の概要

発掘調査は部分的な発掘によってそれぞれの遺跡の範囲と保存状態を確認する目的で実施した。

勝達寺跡の調査は、遺跡推定地の全体規模約3,750m<sup>2</sup>のうち、宅地化されていない西側を対象に3箇所の調査区で合計35m<sup>2</sup>の発掘を行った。

一方、七尾城跡は尾根上と谷間に曲輪が分布する遺構部分約37,000m<sup>2</sup>のうち、本丸跡において約90m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。さらに、七尾城跡については今後全体の詳細地形測量図を作成する予定で、今年度は本丸跡を中心に約1,400m<sup>2</sup>の範囲を、縮尺200分の1、25cmの等高線測量を行った。

勝達寺跡の現地調査は平成4年12月9日に着手し、平成5年1月19日までの間で、七尾城跡の現地調査は平成5年1月13日に開始し、埋め戻しを含め3月31日に終了した。

なお、この間に適宜調査指導を受け、勝達寺跡の発掘調査についての現地指導は平成4年12月18日（川原、井上）、12月27日（村上）に受け、第1回指導会（熱田、井上、村上、千田）を平成5年1月28日・29日に、第2回指導会（熱田、永原、井上、村上）を2月15・16日に開催した。また、平成5年2月2日には文化庁記念物課服部文化財調査官の現地指導を受けた。

現地説明会は平成5年3月14日に七尾城跡の発掘現場において開催し、約90名の参加者があった。



第4図 調査遺跡位置図（1.勝達寺跡 2.七尾城跡 3.三宅御土居跡）

## 1. 勝達寺跡発掘調査

### (1) 遺跡の概要

勝達寺跡は、染羽町の秋葉山東麓の天石勝神社西方の台地上に位置する。標高 15mあまりの平坦地に推定されており、市道染羽片山線と秋葉山裾に挟まれた一画に推定されてきた遺跡である。背後の南西向きの斜面には勝達寺墓地があり、推定地の西寄りに立ち並ぶ民家(沢沢宅)内には同寺のものと伝えられる井戸が残っている。

調査の対象とした部分は、推定地の東端で最も広く整地された部分で、かつては石勝神社の宮司を務めた龍家の家屋があったが、近年解体されている。

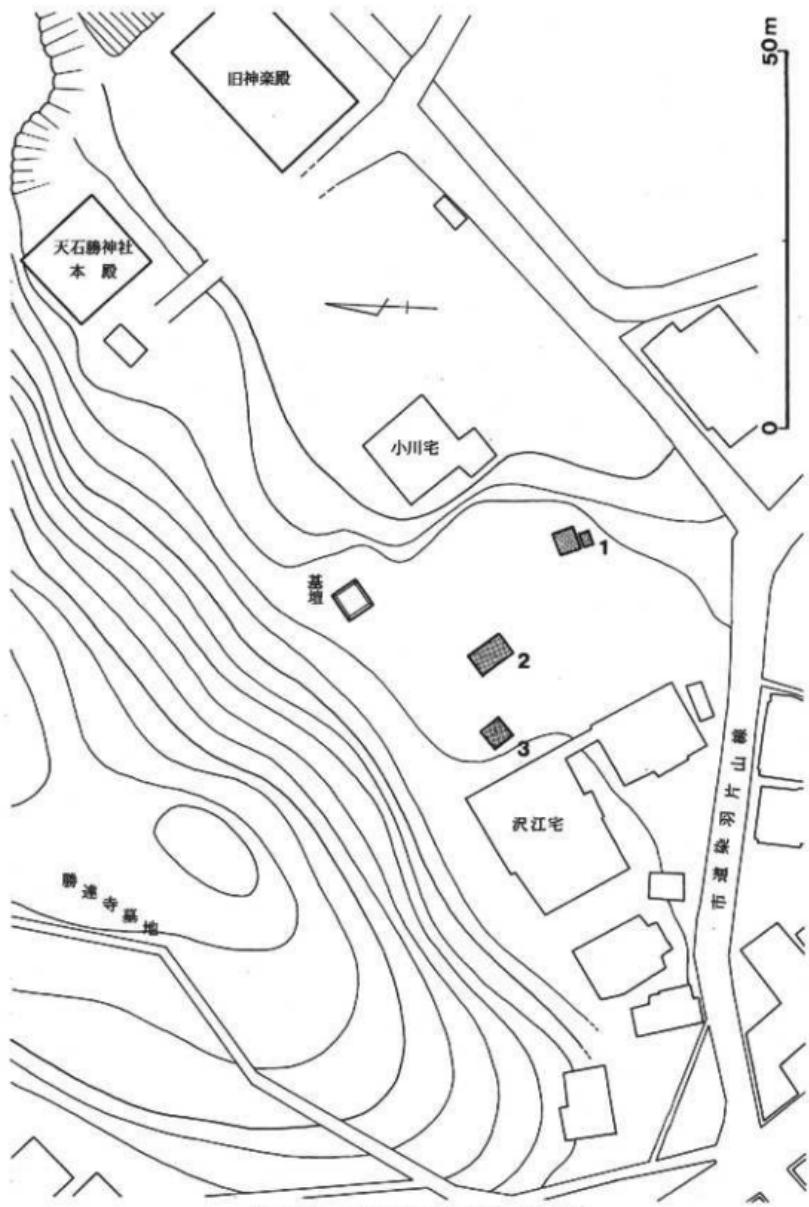
勝達寺は、神龜四年（727）に創建されたといわれる式内社染羽天石勝命神社の別当寺として承平元年（931）に淨藏大徳によって建立されたと伝えられる。天石勝神社は後に熊野権現を祭るようになった。勝達寺の宗派は古義真言宗で、以来高野山金剛峰寺の支院、正智院役寺金剛院の末寺となり、中世を通じて益田氏の庇護を受け、江戸期には朱印状を得ていたが、廃仏毀釈により廃寺となった寺院である。

勝達寺に関する資料は少ないが、古図がある。（P 13 第7図）右上方に山腹の岩肌と滝があり、その下に本殿と神楽殿が存在するが、左上方の台地には勝達寺の建物が描かれている。距離感や位置については表現上の省略や誇張もあるが、本堂は境内地の隅に描かれ、左手から本堂の前方の門まで細長い建物が連続してたてられている。また、もうひとつの絵図として江戸末期の作成と思われる益田本郷の絵図面がある。（P 13 第8図）これについても、天石勝神社の滝と本殿、神楽殿があり、そのすぐ西隣りに本堂らしき大きめの建物ともう1棟隣接した小建物が描かれており、冠木門らしき門もある。このように、勝達寺の立地については天石勝神社の西に隣接して存在したことがわかり、現況も同寺の境内と思われる平坦地が観察できる。これら絵図についてはさらに詳細な読み込みが必要である。この他、天石勝神社には主に近世文書が多数保管されており、この中に勝達寺に関するものも含まれるが、写真記録や解説の作業は未実施のため、別の機会に報告紹介することとした。

なお、廃仏毀釈当時の記録は今のところ確認されていないが、本尊不動明王坐像は救いだされ、現在は神奈川県鎌倉市極楽寺に現存し、重要文化財に指定されている。

### (2) 発掘調査の結果

今回の調査は勝達寺跡の東寄りで、かつて龍家の家屋があったが、現在は畠等に利用されている平地に将来住宅建築の計画があるため、同寺跡の保存状態と範囲を確認する目的で発掘を行った。調査区は平地の南東部の縁近くに1区、中央部分に2区、東側の民家近くの



第5図 勝達寺跡調査区配置図

北西隅寄りに3区を設けた。

1区は3m×3mの調査区で、後に30cmの畦を残して南側に1.5m×2mの調査区を追加した。発掘の結果、北区の北西では現在の地表面から最も深いところで30cmの深さで岩盤が表れ、特に南区の西壁沿いでは、この岩盤はほぼ地表面に表れた状態であった。北区の南半区をさらに掘り下げたところ、このように表れた岩盤は東側に向て、南側ではやや西に回り込む方向に肩を持って急激な斜面となっていた。北区と南区の東壁沿いは現地表からそれぞれ2.2m、1.6mの深さまで発掘したが、岩盤はさらに下方に続き、その上に堆積し現表土の上に人工的な盛り土の斜堆積土が何層にも重なっており、これらは特に締まったものではなかった。斜堆積土は東及び南の方向に斜めに堆積していた。岩盤の斜面を短期間に盛り土造成し、現在の平地が造られている。盛土の中位からは鉄製品や陶器片が出土しているが、特に陶器についてはかなり新しい。この造成は庵寺以降の比較的新しい段階に行われた可能性もある。

なお、北区の北半区の東側には表土下に割石といぶし瓦の棟瓦片が比較的多数出土したが、遺構に伴う遺物ではない。天石勝神社に残る資料では延享三年（1746）の勝達寺の建物に瓦は用いられておらず、本堂は柿葺、その他の建物も柿葺、板葺、萱葺と記録されている。

2区はほぼ中央の位置に設けた調査区である。南北5m、東西2.9mで畑の耕作表土を取り除いたのち、地山面を検出した。地山は現地表から北側では10cm程度、南壁沿いは約30cmの深さで、5cmから10cm程度の角礫を多量に含み、きわめて堅く締った明黄色土であった。この地山は、調査区のほぼ中央から南へは少しづつ下がり、地山と表土との間に暗茶褐色土が狭まれていた。勝達寺に関わる遺構は確認できなかったが、調査区の南壁付近では、集石、ピットなどの遺構が確認された。

調査区の南東隅には割れた状態の30cm大の川原石と15cm以下の円礫、割石からなる直径1mの半円状に明瞭なまとまりがあった。その西には30cm以下の割れ石と埋め土中にいぶし瓦片が含まれる。掘肩は直径約50cmのほぼ円形である。その北には約1.1m離れた位置に25cm大の割石と掘肩が直径40cmの円形の変色部があった。さらに、東壁沿いにも、直径40cmの円形の変色部分に、20cm大の割石3個と10cmの円礫がまとまっていた。これら3箇所の集石は規模や内容、間隔から互いに関連を持つ遺構と考えられるが、性格はわからない。

2区の遺物としては、いぶし瓦の棟瓦片が若干出土したのみである。

なお、地山の確認のため、東壁沿いに30cmのサブトレンチを設定して地山面から45cmの深さまで、南東隅に幅30cmのサブトレンチを東壁沿いに1.5mの長さで設定し、地山面から

約20cmの深さまで発掘を行った。他に、西壁沿いには2層めからの堀込みによるくぼみがあったが、畠の耕作等によるものと考えられる。

3区は調査対象地の北西部、西側の宅地と北の山裾に近い位置に設けた。

南北2.9m、東西2.9mの正方形の調査区で、畠として利用されていた。畠の耕作表土を取り除いたところ、現在の地表面から10cmないし20cmの深さで角礫混じりの明黄褐色の堅く締まった地山が確認された。この検出面を精査したところ、南壁近くに幅35cmから40cmの幅で調査区の南壁にほぼ平行して東西に走る溝状の遺構があった。深さはほとんどなく、わずかなくぼみである。

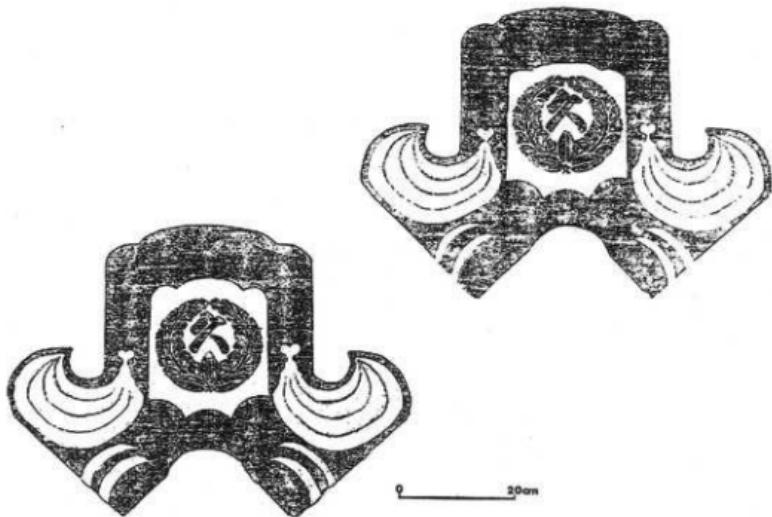
また、北壁沿いに不整形に地山を掘り込んだ遺構が発見された。地山の堀込みは急角度で、約25cmの深さの底は平坦面である。この内部には地山検出面以下に3層の土が堆積しており、4層と5層の上に15cm以下の割石のまとまりがあり、さらにその直上にはいぶし瓦片、陶器片、磁器片若干が出土した。この遺構については性格は不明である。

さらに、南壁沿いの中央部に直径50cm程度で深さ約10cmの円形のくぼみが壁際に半円形に確認され、そのすぐ西側にも直径40cm、深さ10cm程度のくぼみがあった。

これらの遺構についての性格は不明だが、出土遺物の様相からかなり新しいものと考えられ、直接勝連寺に関わるものではないと思われる。

以上のように、今回の発掘調査では勝連寺跡の遺構を確認することはできなかった。極めて狭い調査面積ではあったが、遺物についても中世期のものは見当らず、江戸末期から近代、現代の時期的にかなり新しい遺物しか出土していない。

なお、調査対象とした平地の北東にあたる山裾沿いの竹藪内にかつて召靈社が建っていた基底部が3m×2.6mの切石積みの基壇が残り、一帯には多量のいぶし瓦がまとまっていた。かつて末期の勝連寺に使用されていたものも含まれると考えられるが、特に益田家の紋章を入れた鬼板2点をはじめ、制作工場の刻印があるもの、軒平瓦等状態の良いものを譲り受けている。



第6図 勝達寺跡探集鬼板拓本



第7図 石勝神社勝達寺古図  
(1975『益田市誌』上巻より転載)



第8図 益田本郷絵図(部分)  
(益田市所蔵)

## 2. 七尾城跡発掘調査

### (1) 遺跡の概要

七尾城跡は益田平野の南東方、住吉神社の背後の北向きに派生する丘陵地上に立地する益田氏歴代の拠城である。最高部は本丸跡と呼ばれる曲輪で、標高は約 117 m、平野部を眺望できる格好の位置である。

昭和 47 年 3 月 31 日付け島根県教育委員会告示第 6 号で「七尾城跡付妙義寺境内」として島根県史跡に指定された。七尾城跡の指定地番は 46 筆、台帳上の面積は 277.151 町<sup>2</sup>であるが、城域内で未指定の地番が 3 筆あり、また、艮の出丸部分は指定地に含まれていない。

築城の時期については、建久 4 年（1193）に益田氏 4 代兼高が築いたとする説や 13世紀中頃に蒙古襲来に備えて石見十八砦のひとつとして 6 代兼時が築城したとする説など諸説があるが、鎌倉時代に原型が生まれたと考えられている。南北朝期の延元元年（1336）に三隅氏が大手口尾崎木戸に押し寄せて合戦が行われたことが史料に残る。

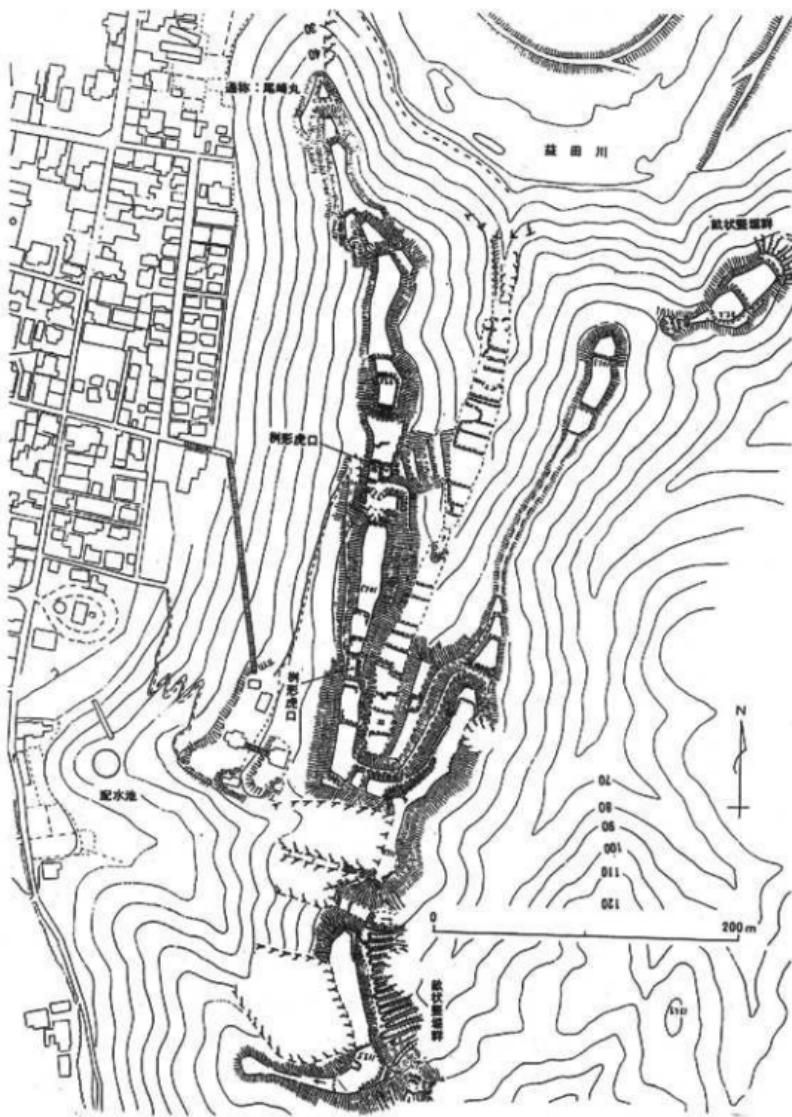
戦国時代、19 代藤兼が弘治二年（1556）に、山陰に進出した毛利勢の攻撃に備えて改修され、現存する形態に至ったといわれる。関ヶ原の役の後、20 代元祥が長門須佐に移ると七尾城は廢城となつたが、元祥は家臣を七尾城留守居役として残し、その管理は元和年間まで及んだという。

遺構は本丸跡から南側の尾根、さらに北北東及び北北西の二段に分かれて北に伸びる長大な尾根上に大小 40 あまりの曲輪が存在する。また、要所には土壘（5 箇所の曲輪で確認）、堀切、梯形虎口（2 箇所）などが設けられているが、特に本丸跡の南曲輪の東斜面には 17 本もの連続した敵状空堀群を持ち、艮の出丸にも放射状に 7 本の敵状空堀群を有しており、七尾城跡における大きな特徴のひとつである。

大手は中央の北向きの谷間部分と想定されており、この部分には多数の段が認められる。これを登り切った駁の段近くには直径 1.2 m の石積みの円形の井戸馬釣井跡がある。大手口はこの谷の益田川が間近となる部分に推定され、現在の医光寺総門はかつて七尾城の大手門であったと伝えられている。

城域は長大で、南端にあたる土橋から北端の通称尾崎丸あるいは艮の出丸までの距離は約 600 m を測る。現存する遺構の中で、通称太鼓の段から千疊敷にかけての部分が最古の曲輪とする考え方も示されている。

七尾城跡についてはこれまで発掘調査は行われていないが、本丸跡と二の段に礎石の存在が近年明らかになっている。



(『島根考古学会誌』第8集 寺井毅「石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一本松城の歎状堅掘群についての考察』から引用)

### 第9図 七尾城跡繩張図

## (2) 発掘調査の結果

調査は、昭和58年に確認された本丸跡北端部の礎石建物跡を対象とし、これを発掘調査により再確認することを目的とした。発掘区は、昭和58年に礎石が確認された時の略測図を参考に設定したが、遺物の出土状態や周囲の状況把握のため徐々に拡張した。

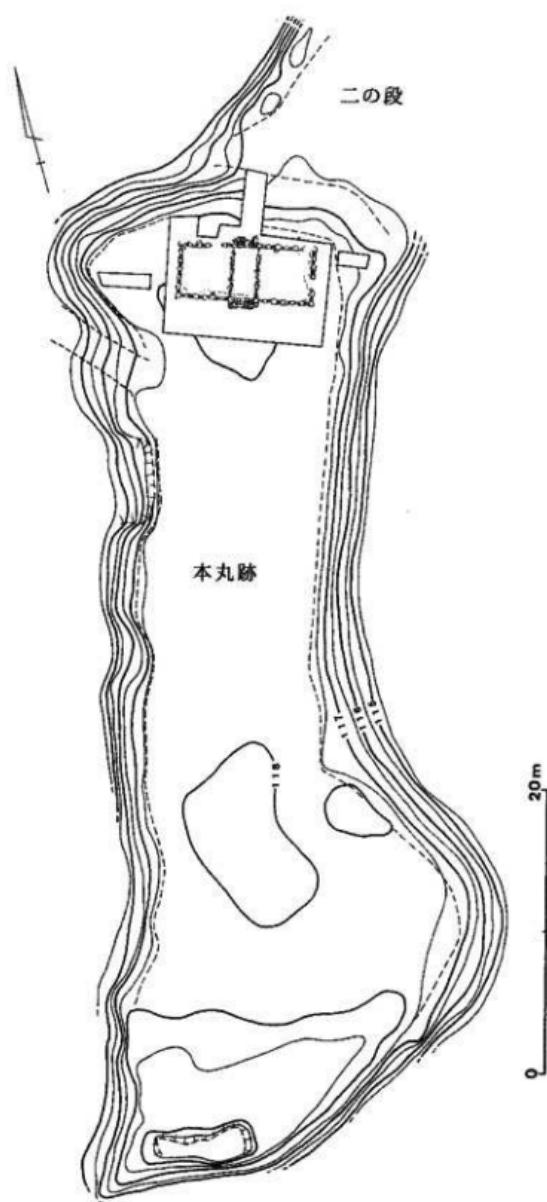
その結果、発見された礎石建物跡は、長辺約10m、短辺約4mの長方形を呈し、中央部にこの礎石列から南北に約1m突出する列石が同一面上に重なった状態で検出された。礎石建物の東側は現在の地表から数cmと全体的にかなり浅いところで確認されたが、西側については発掘前も地表面が若干窪んだ状態であり、礎石の最も低い部分は現地表から約50cmの深さがあった。遺構の位置は約1mの段差がある二の段間際の曲輪の縁辺部にあたり、礎石の長辺が本丸跡の曲輪の長軸に直行する方向に検出された。礎石建物の長軸は磁北に対して65度西に振っている。礎石建物跡の構造については次のとおりであった。

外周の礎石は約60cmごとに30cmから50cm大の扁平な川原石を並べ、その間には1個ないしは2個の割石を挟んでいる。なお、東側短辺の礎石列では川原石1個と3ないし4個の割石が失われており、北側の長辺礎石列では北東隅と西側の一部の礎石が立木の根のため検出することができなかった。礎石の面(つら)は内側に揃えられ、整っていた。

さらに、この礎石には中央に幅2mの間隔で列石があり、外周の長辺礎石の外側に1m突出した状態で重なっていた。これは外周の礎石との比高差ではなく、一体的なものである。この列石は石材の使用方法が外周の礎石とは異なり、約2m間隔に扁平な川原石が使われ、それ以外は割石である。外周の礎石より内側では列石の面はともに内向きに揃っていた。また、外周の礎石から突出している部分は、角部にやや丸味を持たせて、その間に割石を平坦面上向きにして敷き並べていた。

なお、検出された礎石は全体的に左右対称形だが、部分的に石材の使用が異質な部分がある。外周の長辺礎石列の中央の川原石にやや小さめの川原石が連続して置かれているが、これらは北側礎石列では中央の石の東側に並び、南側礎石列では西側に接していた。また、北側長辺礎石の内側で北東隅石から2.5mの位置と南側長辺礎石の内側で南西隅石から2.5mに存在する小さめの扁平な川原石は、遺構の長軸線を対称してそれぞれの反対側に対応する石がなく、建物の中心からの点対称となっている。

さて、この礎石建物の内側には全面に8cm以下の細礫が敷詰められていた。この細礫の面は特に堅く締まってはおらず、清掃時にもかなり注意しなければ簡単に動いてしまうような状態であった。



第10図 調査区配置図

なお、礎石の西側約半分は徐々に低くなつており、東側短辺の礎石中央部の標高は 117.81 m、西側短辺の礎石の最も低い部分は標高 117.18 m で、63 cm の高低差がある。これは、後述するように建築時に尾根の斜面にかなりの土砂を盛土して、この建物の敷地確保のための造成が行われたと考えられ、この造成土が緩んだために沈み込んだものと思われる。礎石の東側は暗茶褐色土の表土のみが堆積していたが、西側は遺構面との間にさらに黄茶褐色土が堆積していた。礎石建物跡の外側の発掘面はほとんど汚れない明黄褐色土であったが、地山ではないと考えられた。

この他、礎石建物跡と二の段との連絡に関わる遺構を確認する目的で二の段に至る斜面に北拡張区を設定して発掘を行ったが、都合により表土を発掘したのみで終了した。この状態で道、石段等の遺構は発見されず、さらにピンボールにより確認したが、発掘斜面以下に石段など石材を使用した遺構はないと考えられた。表土中からは割石、瓦片、土師質土器が比較的多数出土している。

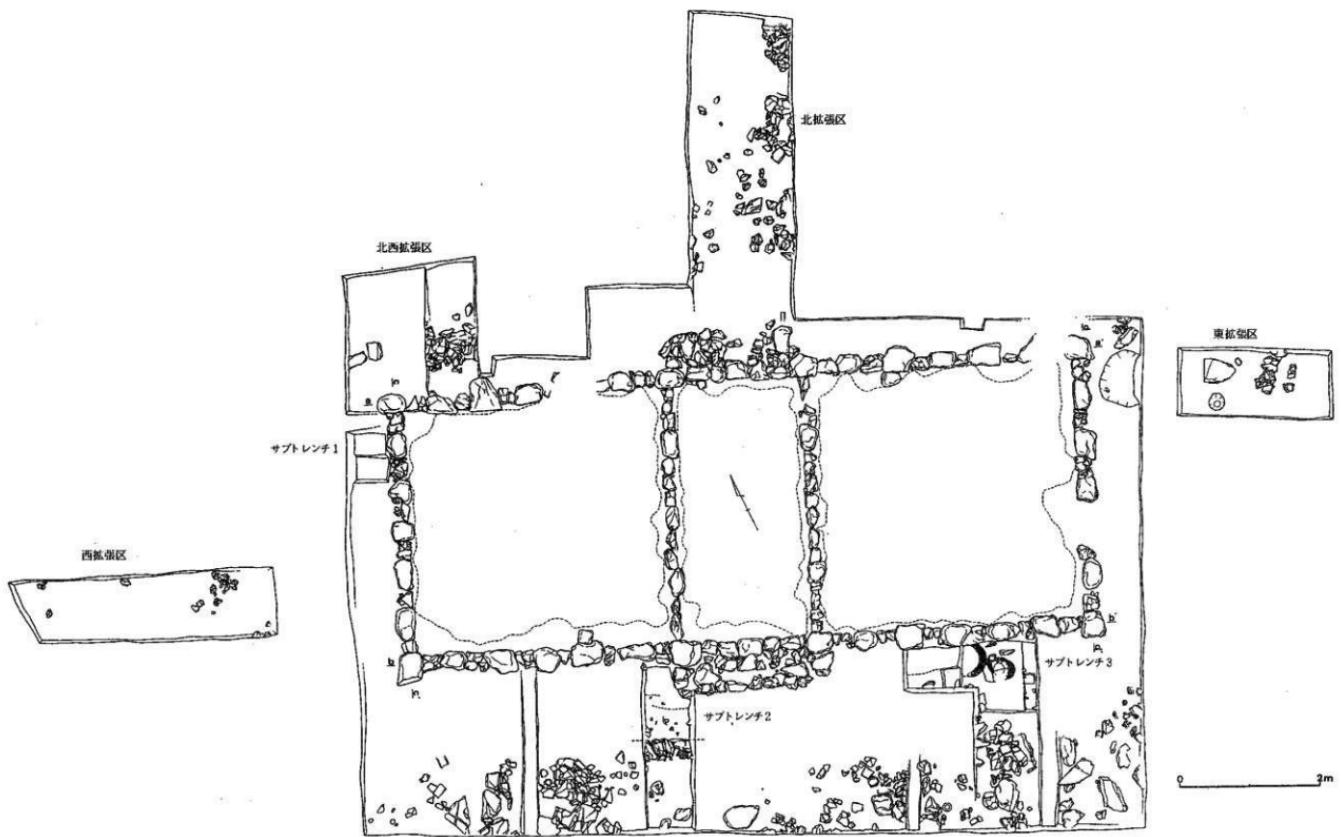
北西拡張区は、この部分に土壘状の高まりが認められたため土壘の存在を明らかにするために発掘を行った。表土を除いた後、東側を幅 70 cm でさらに掘り下げたところ、10 cm から 40 cm 大の割石が曲輪の縁辺ラインに平行した方向に帯状に発見された。土壘の芯として用いられた集石と考えられる。

西拡張区は北西拡張区の結果から、この部分にも土壘が回っていたか否かを確認する目的で設定した。都合により表土を発掘した段階で調査を終了しているが、北西拡張区で確認された土壘の芯となるような割石のまとまりは確認されなかった。

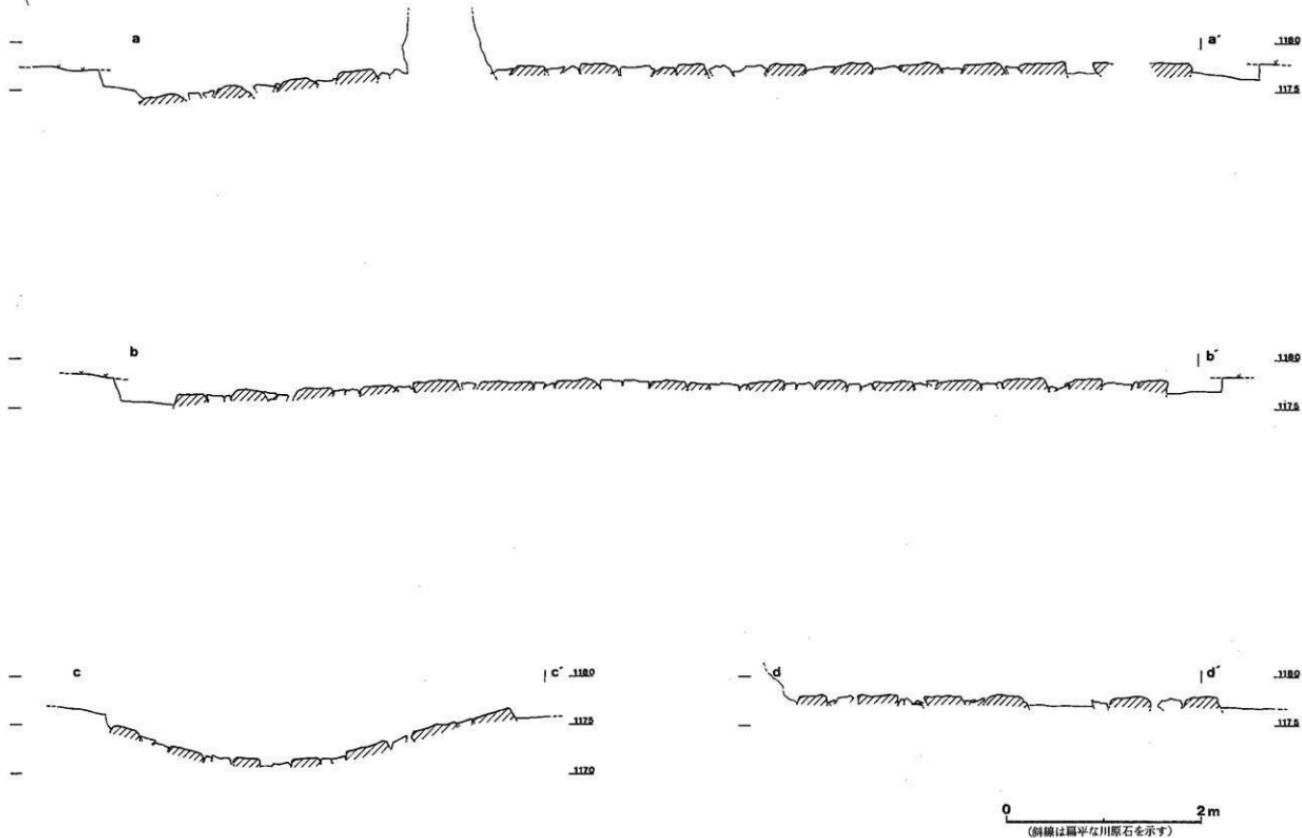
東拡張区は、二の段から本丸跡に上る通路を確認する目的で設定した調査区であるが、表土下の明黄茶褐色土の面まで発掘してピット 2 箇所を検出したのみで、連絡に関わる明確な遺構は発見されなかった。

さらに、調査区内で 3 箇所のサブトレーンチを設定し、礎石建物跡検出面より下層の状態を確かめている。

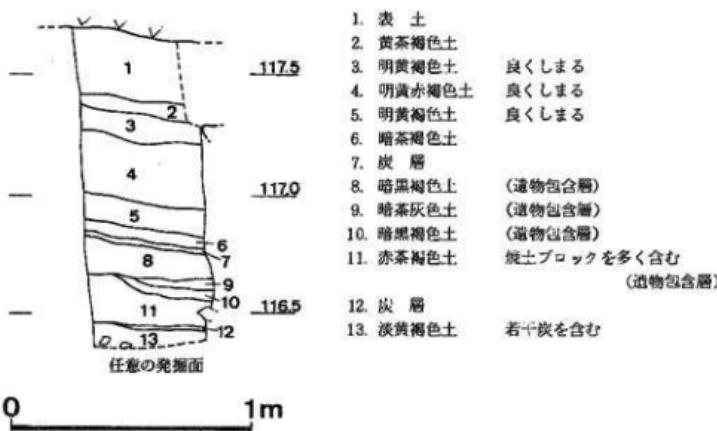
サブトレーンチ 1 は礎石建物跡の北西隅外側に設けた。現地表から 1.3 m、礎石からは 0.9 m の深さまで掘り下げて堆積土層を確認したところ、礎石検出面の明黄褐色土以下に 4 層の遺物を含まない 4 層の堆積層があり、さらにその下には炭層と土師質土器を多量に含む土層と焼土層が厚み 40 cm で堆積していた。この中には鉄滓も含まれていた。任意の発掘面は遺物を含まない淡黄褐色土で、これより下にも整地のための層が続していくと考えられた。これらの層位は、造成時の元来の地形の斜面方向とは逆に、西から東へ下がる向きに堆積していた。



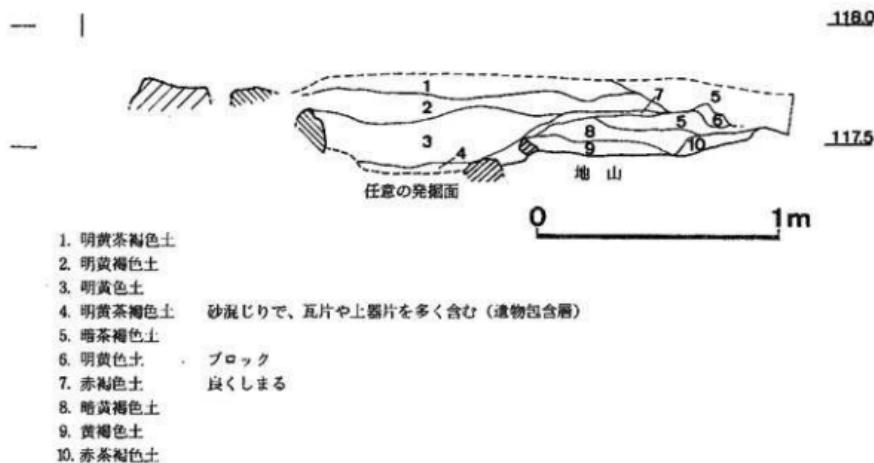
第11図 碩石建物跡平面図



第12図 硬石断面図



第13図 サブトレンチ1北面土層断面図



第14図 サブトレンチ2東面土層断面図

サブレンチ 2 は礎石建物の南側で、やや西寄りの外側に設定した。土層確認のため比較的遺物の出土が少ない位置に設けた。発見された遺構は割石による列石で、南側の礎石列の内面から南へ 1.4 m 離れた位置に確認された。この列石の面は北側に揃えられていた。さらに、列石の北側に接して砂混じりの土が東西方向に幅 50 cm で溝状に確認され、この部分から瓦、土師質土器が比較的多数出土したが、完掘はしていない。列石の南側は 5 層の盛土が堆積しており、風化礫を含む明黄褐色の地山面まで発掘した。地山の標高は 117.46 m であった。

サブレンチ 3 は礎石の南東隅近くの南側に設定した。多量に出土した瓦、土師質土器等の包含層の状態を把握する目的で掘り下げたが、その結果、礎石検出面の明黄褐色土の下層は炭混じりの淡黄色土で多数の瓦片を含んでいた。さらに下層は黒褐色の焼土混じりの土層となり、土師質土器が多量に含まれており、鉄滓も発見された。この土層を部分的にさらに発掘したところ赤褐色の焼土が直径 50 cm と 60 cm の円形に 2 箇所で検出され、鍛冶のための炉跡と考えられた。また、この炉は、東側を幅 20 cm でさらに掘り下げた結果、瓦を含む明黄色土の整地面に築かれていた。

### (3) 出 土 遺 物

発掘により出土した遺物、表面採取による遺物としては瓦、土師質土器、輸入磁器、古銭、鉄製品等があり、量としてはコンテナー 15 箱であった。表面採取としては、本丸跡北寄りの東側斜面から多量の瓦片、土師質土器片を採集し、また、西尾根の中間あたりに位置する土壘を備えた曲輪からは瓦及び瓦質土器を、さらに、東尾根の中程にある長大な曲輪からは瓦片を若干、通称既の段からは数片の磁器を、二の段に登る道沿いで青磁片が採取されている。

以下、発掘によって発見された遺物を中心に、代表的なもののみについて紹介する。

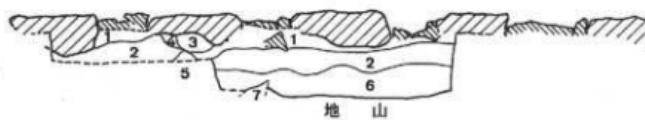
#### ① 瓦 類（第 14 図）

瓦は礎石建物の南側に多量に出土し、内側からの出土量は少ない。種類としては平瓦、丸瓦のみである。また、サブレンチ 2 の列石の北側からは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土している。サブレンチ 3 からは炉跡面以上に丸瓦、平瓦があり、炉跡以下の整地層にも平瓦が含まれていた。この他、北拡張区、西拡張区からも平瓦の破片が若干出土している。なお、1～3 はサブレンチ 2 から、4～8 は礎石建物跡周辺の特に南側から出土したものである。

#### 軒 丸 瓦（第 14 図 1・2）

1・2 は瓦当をもつ軒丸瓦である。1 は瓦当の直径が約 14 cm で、内区に肉厚の三巴文と外

1180



117.5

細 碼



1m

117.5

1. 暗茶褐色土
2. 暗茶褐色土 焼土、炭混じる（造物包含層）
3. 黄茶褐色土
4. 暗黒茶褐色土 焼土、炭が多量に混じる（造物包含層）
5. 炭 層
6. 暗黒褐色土 焼土、炭が多量に混じる（造物包含層）
7. 赤褐色土 炉跡の焼土部分
8. 明茶褐色土 良くしまる
9. 明黄褐色土 良くしまり、瓦片など多く含む（造物包含層）

第15図 サブトレンチ3平面図及び土層断面図

区に珠文を配し、周縁は素文である。左回りの巴は長く尾を引き、ほぼ半周して内区巴文と珠文帯との間の界線に統いており、珠文は約1.5cmの間隔で連続するが、その大半はつぶれている。外区素文縁の幅は1.0cm、高さは0.8cmを測る。2は瓦当の約四分の一が残り、1と同様に内区に左回りの巴文と外区に珠文を配する軒丸瓦である。これらの軒丸瓦はともにサブトレンチ2から発見されたもので、他からは出土していない。

#### 軒 平 瓦 (第14図3)

中心飾りの花文から均整唐草文が派生しているが、上半部を欠いている。下部の素文縁の幅は0.6cm、高さは0.4cmである。サブトレンチ2から出土し、この軒平瓦が今回の調査では唯一のものである。

#### 丸 瓦 (第14図4~7)

すべて玉縁式のもので、凹面の内側両側面と端面が面取りされ、7は玉縁部も面取りされている。すべての凹面には斜め方向に紐状原体による切り離しのコビキ痕跡が残る。また、5と7についてはさらに布目痕も残っている。

#### 平 瓦 (第14図8)

角の一部を欠くが、ほぼ完形品である。幅は24.5cm、長さ29.5cm、厚みは2.0cmで、重量は2.5kgある。

#### ② 土師質土器 (第15図1~14)

土師質土器は礎石建物の南側で、瓦片とともに多量に出土した。この他、各拡張区からも出土しており、第1サブトレンチの包含層からは多量に出土している。礎石建物の南側と第1サブトレンチ内出土のものは他と比較して多量で、破片の状態も大きい。

1・2、9~14が本丸跡東側斜面から表面採取されたもので、3と5は礎石建物跡部分の表土下から、6と8はサブトレンチ1の遺物包含層黒褐色上から多量の土師質土器片とともに、4と7はサブトレンチ3の炉跡面上の炭混じりの黒褐色上層から出土したものである。

1・2は口径8cmの小皿である。1は底部が厚く、2は薄い。3~8は口径12cmから14cmの浅い皿形土器で、3~5は口縁が外反気味に立ち上がる。6・7は口縁が上外方に伸び、8は少し内彎気味に立ち上がるるものである。以上のものについては全体として比較的薄作りでシャープである。

9~14は底径が5cmから6cmの皿形ないし形土器の底部で、9や10と比較して11~14の内面底部には渦状の指圧痕が残る。

#### ③ 輸入陶磁器 (第15図15~22)

### 白 磁 (15・16)

白磁は2点あった。15は本丸跡南端の土壘近くで表面採取されたもので、直径6cm、口縁が外反して立ち上がる 状の器形である。16は本丸跡北寄りの東側斜面から採取された 直径12cmの白磁碗で、内脇気味の体部から口縁端部を強く外反させている。

### 青 磁 (17)

17は口径16cmの青磁碗口縁部で、端部は外側に脹らみをもち、丸い。厩の段からの登り道沿い、二の段間近の所で採取された。

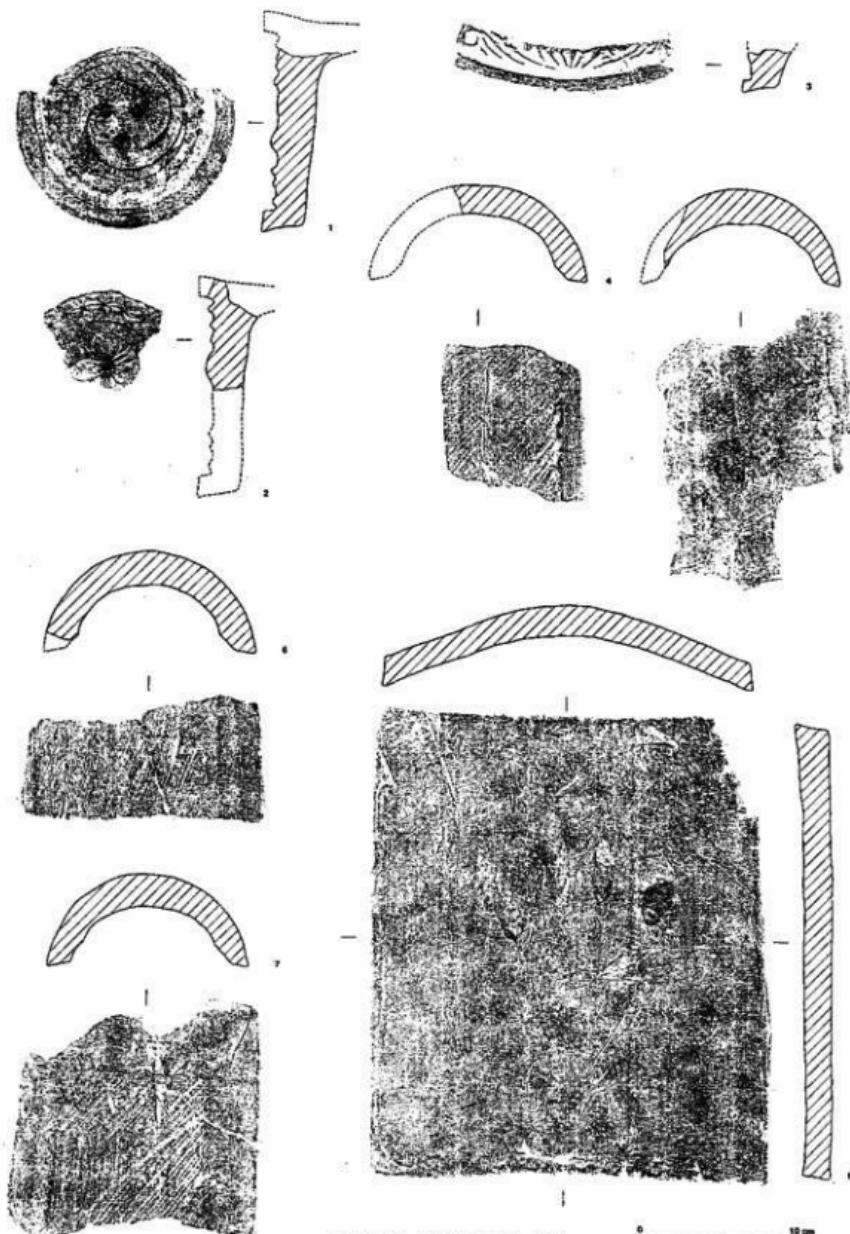
### 染 付 (18~23)

18は礎石建物部分の表土下から発掘により出土し、19から21は本丸跡北寄りの東側斜面から、22は厩の段の南寄りからそれぞれ表面採取された。

18は小型の碗で、端部近くに一条の線を巡らせているが、文様は細片のためわからない。19は直径16cmの浅い皿状の器形で、内外面とも二条の線を巡らせ、その中に草花文を描いている。呉須は濃い紺色で鮮やかである。20は底径5cmの碗底部で、内面見込みに一本の線を回し、その中に文様が描かれている。底外面は、高台内側に線を巡らし、「造」の文字が見える。高台外面にも二条、さらに高台から体部にかけての位置にも太い条線を回し、体部外面にも文様が施されている。他と比較して、この呉須は黒っぽい色である。21は底径6cmの皿で、内面見込みに二条の細線を回し、その内側に文様がある。高台外面にも一本の線が回り、渦巻状の文様が描かれている。呉須は紺色で鮮やかである。22は底径5cmの碗底部である。内面見込みの中心近くに太い線を巡らし、内側に文様がある。外面の高台から体部にかけての位置に二条の線を回し、体部外面には二重の網目文が描かれている。呉須はかなり薄い青色である。

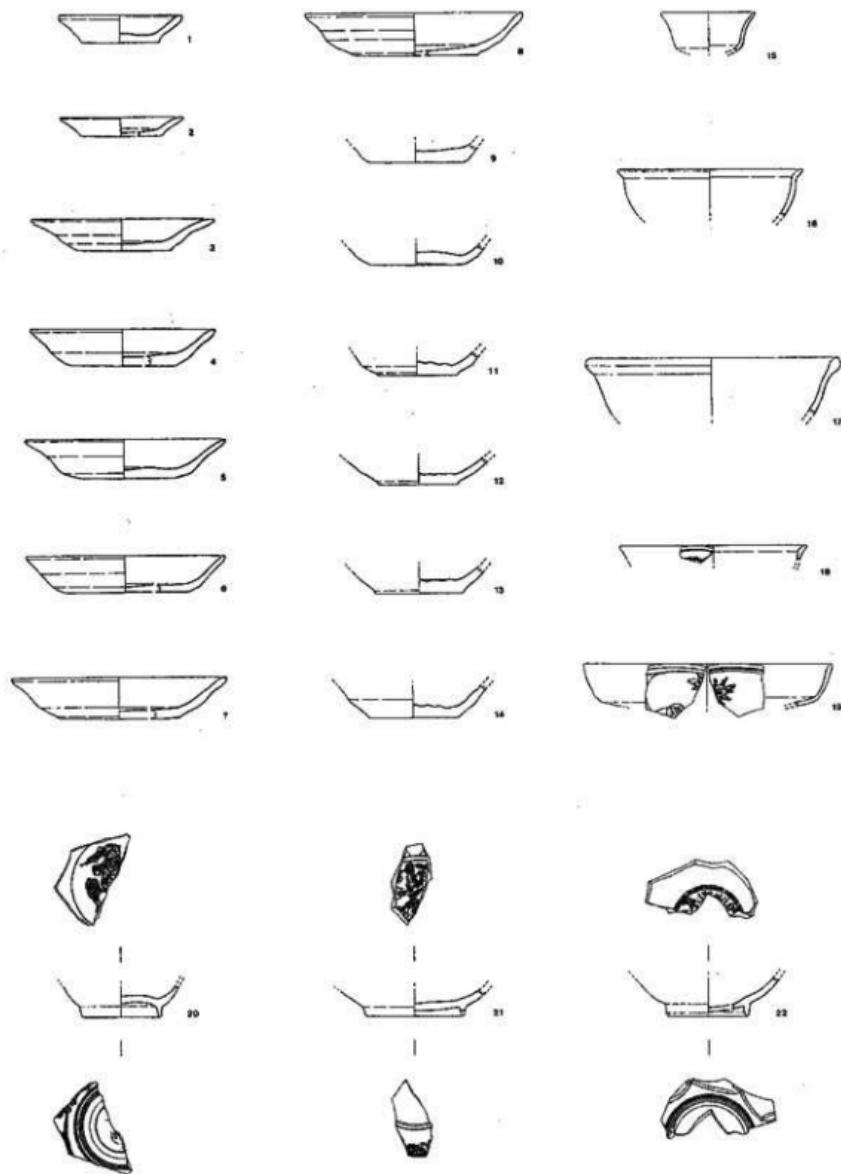
これら輸入陶磁器のうち、青磁は15世紀の時期と考えられるが、その他の白磁、染付は16世紀中頃のものである。

以上その他、10数点の釘状の鉄製品やサブトレーナーの炉跡に伴う焼土中からは鉄滓も出土している。



第16図 遺物実測図 (1)

— 28 —



第17図 遺物実測図 (2)

0 10 cm

## VI まとめ

以上のことより、平成4年度の益田氏関連遺跡群発掘調査は勝達寺跡と七尾城跡の2遺跡を対象に調査を実施した。

勝達寺については染羽天石勝神社の別当寺として承平元年（931）に創建されたと伝えられ、中世期を通じて益田氏の庇護を受け、近世に至っては社領は歴代将軍から朱印状を得ていた寺院であり、かなりの勢力を持ち、益田市誌掲載の勝達寺古図からも比較的規模の大きな境内であったことがわかる。しかし、結果的に遺構を確認することはできず、また、江戸後期を遡る遺物も皆無であった。発掘を行った箇所は、東端に位置することから境内の端部とも考えられるが、勝達寺跡推定地の中では最も広い部分である。この結果から勝達寺跡の推定が誤っているという考え方もあるが、背後の秋葉山斜面には勝達寺墓地が残り、勝達寺古図あるいは江戸末期の美濃郡上本郷村絵図による天石勝神社等近隣寺院などとの位置関係や距離感から、やはりこの一帯に勝達寺が存在したと考えられ、広範囲を対象とした発掘調査をさらに継続して実施する必要があると考えられる。

一方、七尾城跡では本丸跡北端部においてほぼ完全な状態で礎石建物跡を確認することができた。礎石の規模は必ずしも大規模ではないが、礎石の面を内側に揃えていることや、点対象となる石材が存在し、さらに、中央部に礎石列から両側に突出した形で二列の列石が重複していることなど礎石の構造の細部についても特徴的な点が多い。また、礎石の内側に敷かれている細縫の用途も不明である。いずれにしても、周辺から多量の瓦片が出土したことから、発見された遺構は礎石を持つ瓦葺の建物跡であり、かなり重厚な建造物であったことが想像される。規格性としては6尺5寸（約197cm）を基本とし、これを二等分あるいは三等分して礎石を並べている。建物の性格については、その検出の位置から推して門としての性格が予想されるが、構造については現時点で具体的に復元できず、今後の課題としたい。また、今回の調査ではこの建物と二の段との連絡に伴う遺構は確認できていない。なお、曲輪の縁辺部に礎石を持つ建物が存在する遺構のあり方は高知県久礼城跡に類例があり、ここでは櫓が推定されている。

出土あるいは表面採取した瓦のうち、特に丸瓦については内面に残る切り離し痕が紐状原体によるコピキAと呼ばれる調整痕を残しており、図に示さなかった多量の丸瓦片についてもほとんどが同じ特徴を持っていた。この特徴については根津高櫻城跡における研究成果から畿内における天正11年から14年頃以前の時期の手法と考えられている。

このように、地方豪族の戦国末期の城郭において瓦葺の礎石建物跡が確認されたことは、今後の七尾城跡における建物配置の確認とともに城全体の構造や機能を解明するうえで重要な成果といえよう。さらに、16世紀における益田氏に関しては、文献資料3で19代藤兼が「御城山滝尾之南、大手之曲輪一ヶ年及御隠居候而」、さらに文献資料4により20代元洋が「天正11年に御下城し、三宅へ御居を構えた」という記述から、16世紀の中頃に三宅御土居から七尾城に移って一時期居住し、再び三宅御土居の普請を行い下城したと考えられている。今回の調査結果はこの文献の記述を裏付ける端緒とも評価できよう。その点で、昭和58年の礎石確認調査では二の段北端にも礎石の存在が報告されていることから、この部分にも礎石建物の検出が期待される。

今年度は本丸跡を中心に二の段の南側を含めた範囲のみの現況地形測量を実施した。七尾城跡における地形測量は今後も継続して最終的に遺構部分の約37,000m<sup>2</sup>を行う予定である。なお、近年は城内に家臣団の居住空間が存在することが調査で明らかになっているが、七尾城跡では大手と推定されている北向きの谷間に多くの段が観察され、ここに家臣団の屋敷の存在する可能性も推定されていることから、その部分も含めての詳細な地形図を作成する計画である。

- 参考文献
- 1958 矢富熊一郎『石見染羽天石勝神社史』
  - 1965 矢富熊一郎『益田七尾城史』
  - 1975 『益田市誌』上巻 益田市誌編纂委員会
  - 1979 広田八穂『中世益田氏の遺跡』
  - 1984 『浜津高槻城本丸発掘調査報告書』高槻市教育委員会
  - 1985 広田八穂『西石見の豪族と山城』
  - 1991 『三宅御土居跡I』益田市教育委員会
  - 1992 『三宅御土居跡II』益田市教育委員会

# 文 献 料

資料一 周布吉兵衛文書

右、当國姫起之間、屬三隅二郎人道伸性、柄籠河内城之處、朝敵人大将益田二郎太郎兼行、同舍第三郎・乙吉十郎以下之輩、率數千騎之軍勢等、柄籠益田城之間、今月廿一、日押波城、實破北尾崎木戸、致散々合戦、大森代大進房首取舉、仍大將三隅太郎兼知見知之上者、早賜御一見状、為備上覽、相言上如件

延元々年七月廿六日

承候了  
(三隅兼連)  
沙弥 信性判

資料三 元祥(?)下諸控物并中間申談之書付共 十八通

右見國周布郷内村地頭孫六・華原兼茂誰言上

左、當國姫起之間、屬三隅二郎人道伸性、柄籠河内城之處、朝敵人大将益田二郎太郎兼行、同舍第三郎・乙吉十

一、御城山(?)  
二、被為置候者  
益田彦右門  
益田利部  
益田伊兵行  
小原豊前  
小原日向  
大谷大炊  
羅田伊賀  
宅野筑前  
品川次郎(?)  
系寶右近

(略)

一、御城山淹尾之南、大手之曲輪(?)  
二、ケ年及御隨居候而、其間二止路之御普請成就仕被地被成御引越十年及御座

候而、天正十七年(?)  
三隅之大寺へ御引越、八年被成御  
座慶長元年極月朔日(?)  
御六十八歳(?)  
て  
被成御過去候事

資料四 小室彦兵衛鉛録「牛廢錄御代覚書」

天正十二年御家中へ元祥被仰渡候者、皆々物懸り之、私  
領石高付し可申候。就御下城、三毛江御居構、可被仰付  
と思召候。然時は普請火、大分可被為人条石割に成人、御  
讚候之為之門。書付を以可申出之旨、被仰渡候。各持懸り  
之知行高中上候辻は、御拵させ被為置候事。

愚々謹言  
六月九日  
良智(花押)  
重連(花押)

永安左近得監殿

資料一 1970 山口県文書館「萩藩開闢記」に掲る  
資料二 益田家文書八ノ三七(原資料は東京大学史料編纂所所蔵、益田市立図書館所蔵益田家文書解説原稿に掲る)  
資料三 益田家文書八五(原資料は東京大学史料編纂所所蔵、益田市立図書館所蔵益田家文書解説原稿に掲る)  
資料四 原資料は未確認のため、1979 広田八徳「中世益田氏の遺跡」に掲る



勝達寺跡調査区配置状況（北西から）



勝達寺跡第1区発掘状況（北から）

図版 2



勝達寺跡第2区発掘状況（南から）



勝達寺跡第3区発掘状況（南から）



七尾城跡遠景（北西より権山から）



三宅御土居跡遠景（七尾城跡本丸跡から）

図版 4



礎石建物跡（南から）



礎石建物跡の中央部（南から）



礎石建物跡（東から）



礎石建物跡（西から）

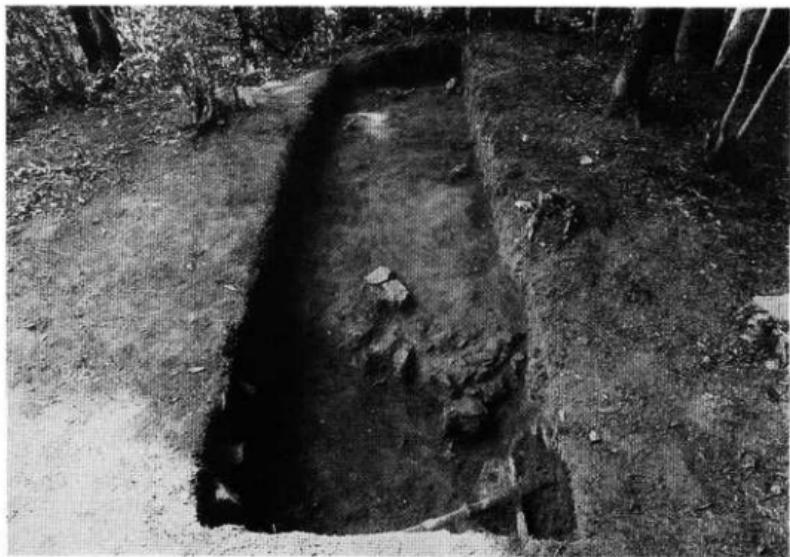
図版 6



北拡張区発掘状況（北から）



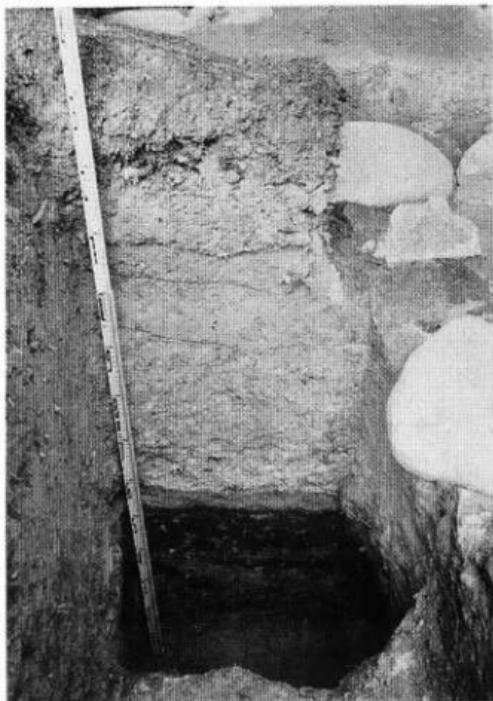
北西拡張区発掘状況（東から）



西拡張区発掘状況（東から）



東拡張区発掘状況（西から）



サブトレンチ1の土層堆積  
状況（南から）



サブトレンチ2の発掘状況（西から）

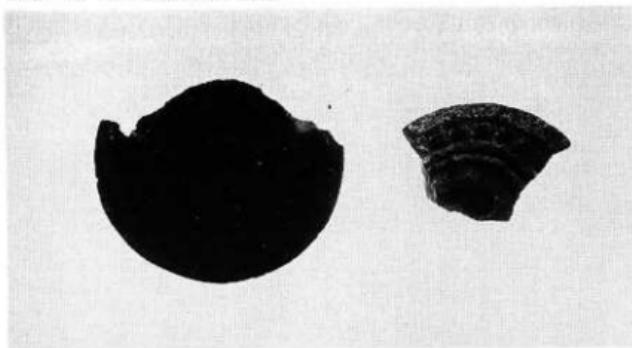


サブトレンチ 2 の瓦出土状況（西から）

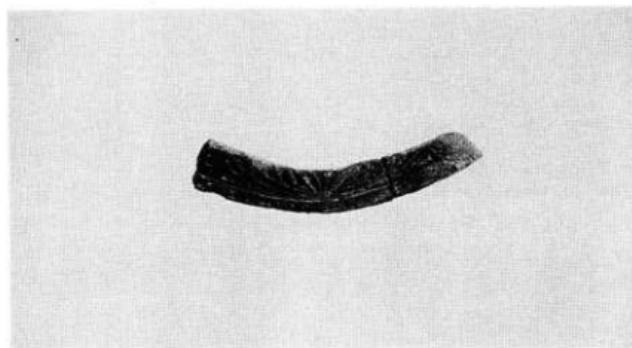


サブトレンチ 3 の発掘状況

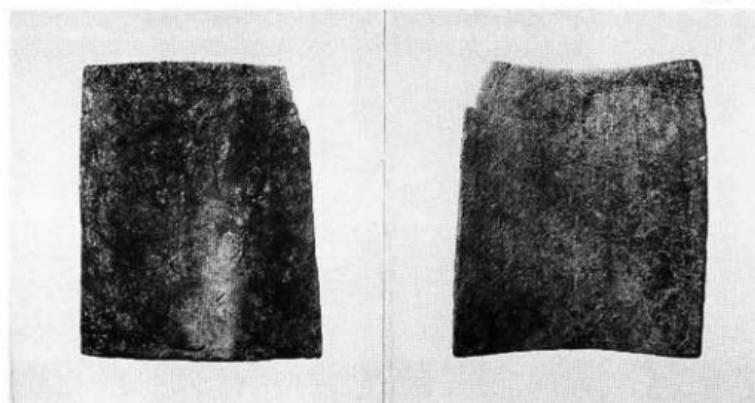
図版 10 (七尾城跡出土遺物)



軒丸瓦



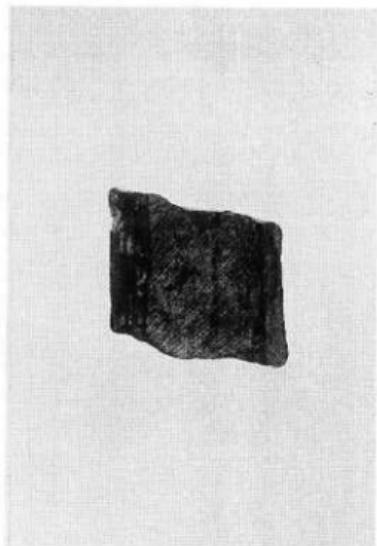
軒平瓦



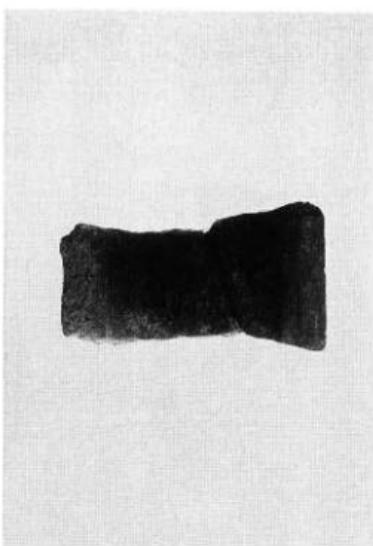
(表)

(裏)

平 瓦



丸 瓦(1)



丸 瓦(3)

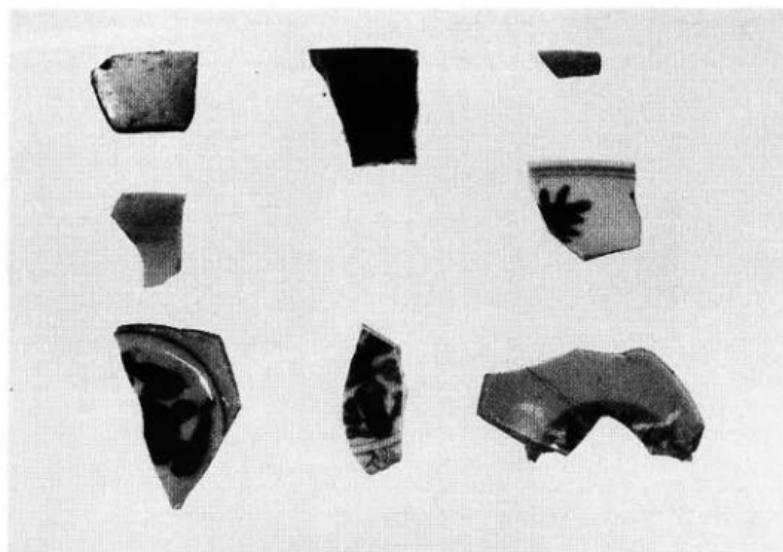


丸 瓦(2)

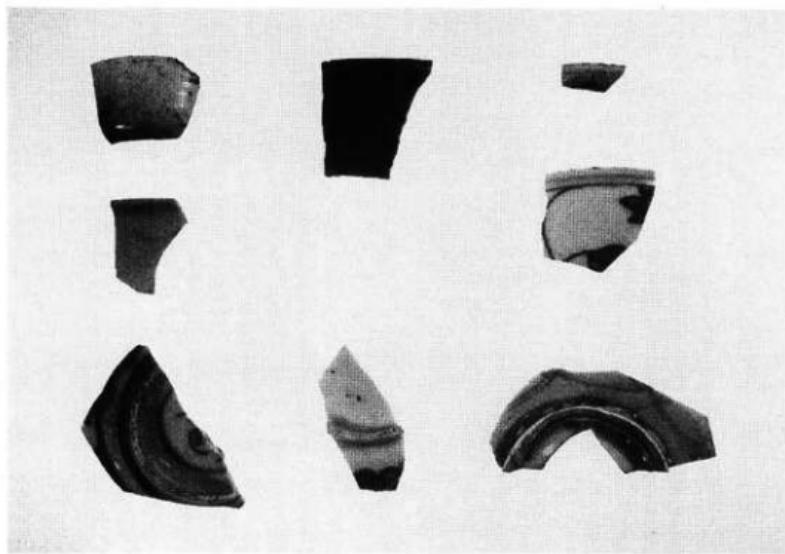


丸 瓦(4)

圖版 12 (七尾城跡出土遺物)



輸入陶磁器（内面）



輸入陶磁器（外面）

---

## 益田氏関連遺跡群 I

—— 勝達寺跡・七尾城跡 ——

平成 5 年 3 月発行

編集・発行 益田市教育委員会  
島根県益田市常盤町 1 番 1 号

印 刷 (有) 大 場 印 刷  
島根県益田市中吉田町 659-4

---